

The Rainbow のアーシュラ

Ursula in *The Rainbow*

中山本文

Lawrence first intended to publish the new story titled *Sisters*, but he changed his original plan and split it into two stories, *The Rainbow* (1915) and *Women in Love* (1919). Lawrence refers to the relations of the two stories in 1916, saying that *Women in Love* is a kind of sequel to *The Rainbow*. F.R. Leavis commented on the later work, pointing out that it is "wholly self-contained" and has "no organic connexion with *The Rainbow*." His point is understandable when we consider that the writing style of *The Rainbow* belongs to the 19th century English novel, while *Women in Love* is analytic and esoteric. However, the truth is that the main interest of the stories is quite similar to each other. Leavis's point of view attracts our attention in that he believes Lawrence was well matured enough to write *Women in Love* by the time (1915) when he finished *The Rainbow*. This suggests that the author had already had that critical mind represented in the later story, which is well enough proved by the characterization of Ursula in *The Rainbow*. Although Leavis is negative of the connection between *The Rainbow and Women in Love*, Ursula in the former novel is surely identical of another Ursula in *Women in Love*. It is not too much to say that *The Rainbow* was written in order to create Ursula.

The cardinal purpose here is to discuss how important Ursula is for *Women in Love*, paying attention to Ursula in the former story.

キーワード: freedom, reality, consummation, new life

はじめに

F.R.Leavisは、*The Rainbow* と *Women in Love* が元々ひとつであったものが分離して生まれたことは認めつつも、二つの作品の関係が、普通 "a sequel" が意味するものを超えていると述べている。もちろん、彼はロレンスが1916年に *Women in Love* について "a kind of sequel to *The Rainbow*" と言っていることは十分承知している。*Women in Love* は "wholly self-contained"

で、“no organic connexion with *The Rainbow*” というのが Leavis の見解である。彼の発言で注目したいのは、1915年までには、ロレンスはすでに *Women in Love* の、あのロレンスであったと確信している点である。これは非常に重要な発言である。*The Rainbow* を書いている時のロレンスはすでに *Women in Love* で開示されている問題意識を持っていたということである。そのことを *The Rainbow* のアーシュラの人物造型が十分に証明している。Leavis はこの両作品の関連を否定するが、二人のアーシュラは間違いなく同一人物である。*The Rainbow* はアーシュラのために書かれたといっても過言ではない。そして *Women in Love* のために *The Rainbow* は必要だった。

一見異なる物語ではあるが、しかしながら、最初一つの作品として構想されていただけに、*Women in Love* で展開されている世界はその核心の部分で *The Rainbow* の世界と密接に関わっている。*The Rainbow* のアーシュラの感性は *Women in Love* のアーシュラのものであり、作品の問題意識に広がりとお興きを与えている。すでに筆者は *Women in Love* の初稿 *The First Women in Love* と最終稿の比較検討を行い、ジェラルドに注目して初稿を改訂した作者の意図を考察した。しかしながら、*Women in Love* の全体像の把握にはまだ解明されなければならない課題がいくつも残されているように思える。

本稿の目的は、*Women in Love* の世界の全体像に新たな視点からアプローチすることをめざして、*The Rainbow* のヒロイン・アーシュラに焦点を当て、*Sisters* を二つに分けた作者の意図を明らかにする事である。

I

The Rainbow の Brangwen 家の親子三代の女性たちは非常に異なる人生を送っている。そこには時代の変遷もあるが、性格が大きく作用している。

この物語に最初に登場するリディアは、かつてポーランドで医者をやっていた愛国主義者のレンスキーと若くして結婚している。社会についても、自分についても無知なリディアは盲目的に夫に従い、彼の影のように毎日を生きてきたが、夫の死後、アーシュラの祖父トムと結婚し、一人の人間として生きることを学ぶ。リディアの娘アナは今日の暮らしのことばかり考えて、ひたすら母性に浸りきって生きて、アーシュラが12歳になってもまだ子供を生み続けている女性である。アナの娘アーシュラは、母とは違って、学問を身に付けることで自立して、自分の力で生きていこうとしている女性である。学問によって、完全な独立、完全な社会的独立、どのような人間の権威からも完全に独立しようと、大学入学を目指している。知識を身に付けることで、社会の一人の働き手として、男の世界で自分の存在を示すことで、その第一歩を印そうとしている。その意味で祖母とも母とも大いに異なる。慣習や伝統に囚われない、何か自由な新しい意識に目覚めた女性である。

一方、*Women in Love* のアーシュラであるが、第一章 *Sisters* でアーシュラとグドルーンの二人

が結婚について語り合っている場面で、このアーシュラが *The Rainbow* のアーシュラと酷似していることが明らかになる。二人には、結婚によって今より一歩前進するという、オースティン (Jane Austen) の小説に見られるような当時の女性の一般的な結婚観はない。その意味で二人の結婚観は伝統的ではない。むしろ伝統に対して否定的である。以下は二人が自宅の窓辺で編み物をしたり、絵を描いたりしながら、結婚について話をしている場面である。

"You don't think one needs the experience of having been married?" She asked. "Do you think it need be an experience?" replied Ursula. "Bound to be, in some way or other," said Gudrun, coolly. "Possibly undesirable, but bound to be an experience of some sort." "Not really," said Ursula. "More likely to be the end of experience." (WL7)

伝統的な結婚に否定的ながら、しかしながら、「経験の一つとして必要だ」と妥協的な態度を示すグドルーンに対して、アーシュラの否定の姿勢は強い。しかも、彼女の否定は単なる否定ではなく、常に自分なりに自分の人生を把握しようと努めている。この点で、"Nothing materializes! Everything withers in the bud" (WL8). と投げやりな人生観を持つグドルーンとは異なる。アーシュラには "strange brightness of an essential flame" (WL9) がある。

But underneath, in the darkness, something was coming to pass. If only she could break through the last *integuments!* She seemed to try to put her hands out, like an infant in the womb, and she could not, not yet. Still she had a strange prescience, an intimation of something yet to come. (WL9) (*italics mine*)

何か古い殻を破って、新たな世界の空気に触れようとする欲求は *The Rainbow* のアーシュラにも明確に読み取れる。恋人のスクレブンスキーと別れた後、病気にかかったアーシュラは一種のこん睡状態のなかで、懸命に古い世界の圧迫から逃れようとしている。自分にまともなついている古い世界の呪縛を断ち切ろうとしている。以下の一節はこの物語のアーシュラと *Women in Love* のアーシュラとの明確な類似性を示している。

... all *husk* and *shell*, she could see nothing else, she was enclosed still, but loosely enclosed. There was a space between her and the shell. It was burst, there was a rift in it. Soon she would have her root fixed in a new Day, her nakedness would take itself the bed of a new sky and a new air, this old, decaying, fibrous husk would be gone. (R456) (*italics mine*)

"integuments" も "husk" も "shell" も二人のアーシュラがいかに古い世界・過去の縛りを意識しているかを物語っている。ここに次作の *Women in Love* で再びアーシュラが、作者の代弁者・パーキンと対峙するヒロインとして登場する意味がある。*The Rainbow* の終章でもまだわずか19歳か20歳の若いアーシュラだがすでに、開かれた意識を持つパーキンと十分に渡り合える資質を備えている。

II

それでは祖母や母が代表する、伝統的な女性像と大いに異なるアーシュラがいかなる特質を持ち、そこに作者が如何なる期待をしているのかを明らかにするために、まず、アーシュラの恋愛を通して浮き彫りになる人物像の検証からはじめる。

Women in Love の場合と同じく、この *The Rainbow* でも月は重要な役割を果たしている。しかし、ここにおける月は、*Women in Love* の *The Moony* という章に出てくる月とは異なる。ある夜、自分の心の中を照らすかに思える月明かりに刺激されて、裸になって砂浜を走り出すアーシュラはまるで月の光に触発されるかのように、"I want to go" (R444) とつい口走る。何かに憑かれたように水辺を彷徨うかと思えば、突然アントンを抱き寄せ、激しく求める。一見単なる性的交渉であるが、彼女にしてみるとことはそう単純ではない。この行為は、ふと "I want to go" と口走らせた何かと深く関わっている。彼女は、彼との接触の中で、「どこかへ」行きたかったのだ。それは単なる衝動ではなく、彼女の存在の根幹に関わる、いわば「生の充足の衝動」(a passion for something she knew not what, R443) といったものである。

彼女の「激しさ」に、アントンが怖気を覚えるのは仕方がない。それは、彼には「生の充足」への欲求がない、あるいは不十分だからである。アーシュラが行為から身を起こした時、自分の前に煌々と輝く月に "How wonderful! How wonderful!" と口走るのは、その月に「存在の充実」と「限りない自由の輝き」を見たからに他ならない。"the ultimate" (R256) への激しい欲求を持つアーシュラに、存在の希薄なアントンが太刀打ちできるはずはない。彼がアーシュラから「逃げ出したくなる」のは仕方がない。

この月は、マギーの兄アントニーと二人でいる時にも現れる。やはり美しい月である。「彼はそれを見ないで、しかも一体になっている。一方、彼女のほうは目で見て、一体になっている。結局、見たということが、二人の間を無限に隔てるものだった。」(R482) 確かにアントニーは魅力的だったが、彼女は「地表を行く旅人に過ぎなかった。」彼は「月と一体に溶け込んでいる人」であった。が、彼女は月を「見る」しかできない人だった。彼は一見、月と一つになれる羨ましい人であるが、「自分だけの感覚の満足に生きている」孤独な人だった。

The Bitterness of Ecstasy にも月の場面が出てくる。彼が帰国してノッティンガムにやってくると、オックスフォードの友人の家に行くことになる。月夜に二人で散歩に出かけると、光が彼の

顔を照らす。不思議な美しさを湛えた彼の顔にまたしても彼女は性の衝動に駆られ、すぐに屋内に戻ると、友人たちと一緒にいるアントンに声をかける。—"Don't be long coming to me!" (R426) 彼女の気持ちを察したアントンは、その場を適当にごまかして急いで彼女の元に行く。彼が戸惑うほどに、アーシュラは激しく彼を求める。一方、すっかり満たされたアーシュラと違って、彼は次第に不安になってくる。彼女が、彼女の肉体が怖いと思えるようになってくる。

First Love という章にもアーシュラが月に魅了される場面が出てくる。アーシュラは16歳の時、21歳のアントンと出会う。それまで不安定な人間ばかり見てきたアーシュラは初めて自信に溢れた人物に会った思いをする。

... he seemed perfectly, even fatally established, he did not ask to be rendered before he could exist, before he could have relationship with another person. (R271)

更に、"so distinct, self-contained, self-supporting" で "a gentleman" (R271) にすら思える。彼女はアントンを通して the vast world (R27) にふれるような気がする。ところが、実はアントンはアーシュラの期待に応えるような男ではない。このことは、川に浮かべた船の上で暮らしている、ある貧しい家族に出会う時に明らかになる。ここに極めて印象的な父親がいる。言葉も態度も粗忽な男だが、なぜかアーシュラは彼に "a pleasant, warm feeling" (R294) を抱く。彼によって、"the richness of her own life" (R293) すら感じている。アーシュラの周囲に、"a deadness" や "a sterility" (R294) を創り出すことしかできないアントンとは対照的である。この、やせた3人の子供たちの父親は、とても無愛想だが "directness" (R294) があり、その「率直さ」でアーシュラを見、彼女の中の「女」そのものを崇めている。「男の全肉体」で、「全精神」で、そのまま「女の全肉体」を、「全精神」を求めている。アントンは、その男の様子に自分を振り返り、女性に対する態度の違いを認識し、はっきりと自分の "inadequateness" を自覚する。自分が彼のように「自分の全男性をもって女を求めること」ができないのはなぜかと自問する。自分が女に近づく時、愛もなければ崇拜もない。あるのはただ「肉体的欲情」だけ。

この章では月はパーティーの夜、ダンスの場面に現れる。二つの意志がひとつの夢幻のような運動に結び合わされる快感にひたっている時、ふと "Some powerful, glowing sight was looking right into her." (R296) のに気付く。その大きな真っ白い凝視を受けて、まるで "Her two breasts opened to make way for it." (R296) かのような錯覚に陥る。そしてついには "She wanted the moon to fill in to her, she wanted more, more communion with the moon, consummation." (R296) とすら思う。この月との交歓にすっかり自分の魂を開ききっているアーシュラはこの "communion" と自己の存在の "consummation" をひたすらに求める。この "consummation" に彼女のどのような秘密が込められているのかは理解しようもないが、少なくとも彼女の祖母や母が意識したこともないような心の在りようを示していることは間違いない。おそらく、月の存在の

様態がその手がかりを与えてくれよう。

Oh for the coolness and entire liberty and brightness of the moon. Oh for the cold liberty to be herself, to do entirely as she liked. (R296)

ここで明らかなように、この物語に出てくる月の表象はさまざまに変化し、さまざまな様相を呈する、変化にとんだ月ではなく、アーシュラが憧れる「自由」とイメージの上で重なっている。自分と一緒に踊りながら、心が自分のところがないことに気付いたアントンは何とかして自分の存在を彼女に認めさせ、「屈服」させようとする。しかし月に魅入られて、すっかり "a sort of trance" (R297) の状態にあるアーシュラには何の効果もない。

He seemed to be annihilated. She was cold and hard and compact of brilliance as the moon itself, and beyond him as the moonlight was beyond him, never to be grasped or known. (R297)

今や「月同様に堅い光の塊」にすぎないアーシュラは、「月の光が彼の手には及ばないように」彼の手の届かないはるか彼方を彷徨っている。このように、アントンはいつも彼女を掴めない。掴もうとすると、いつもその支配の手を逃れていき、彼はその後を追いかけていくだけ。彼は自分が近づけば近づくほど、彼女を知れば知るほど傷ついていくことが次第に分かってくる。"— he seemed to be clasping a blade that hurt him." (R298) すっかり彼女に「呪縛」されたアントンは魂を抜き取られた屍同然、月の女神に供された生贄さながら。「あの自負にあふれ、永劫の炎と燃える核心とを包んだ不適の男性としての彼は、ついに失われていた。」(R298) アーシュラの、あの月のように冷たい炎が、アントンの生命の炎を消してしまった。こうして月に活力を与えられたアーシュラは大地の肉体の臭いを嗅ぐ。そして充足した生の幸福のおのきの運動にふれる。月の夕べが二人に与えた効果はまったく対照的。アーシュラには力にあふれた「生の幸福感」を与え、アントンには生とプライドの喪失感をもたらした。

このことがあって以後、再びアントンが「真の男性」の誇りを取り戻す事はなく、ひたすら「自己」を離れた世界を志向するようになる。すっかり自分に自信をなくしてしまったアントンは、「軍務」に没頭する。自我の完成、自己実現の夢を抱いていた魂は、結局はアントン個人を離れ、「軍隊」という社会機構の中で、その「義務」を果たすことに、その活躍の舞台を求める。その「完成された秩序」の中に身をおくことは、プライドを喪失したアントンにとって大なる安らぎであった。個人の魂の充足だとか、流動する生の輝きを獲得するとかいった問題はアントンの関心の埒外に遠のいてしまう。アントンは実は「微妙な、むずかしい」ものなど求めていなかった。そこに彼がアーシュラに今一步近づけない理由があった。ふと彼女の脳裡をかすめる。"But who was

he, and where did he exist? In her desire only." (R309) という彼女の思いが、彼女における彼の位置を物語っている。一旦見えなくなってしまうと、単なる過去の幻にすぎなくなる。そこに彼の問題があった。

この後、アントンは戦地へ行き、そして再びマーシュに帰ってきて、アーシュラと再会を果たすが、彼女といると「自己の死」という意識が容赦なく襲ってきて、個人的な生命が抜けてしまった、単なる肉体だけの存在になる。機械的な生命、それが彼だった。

III

伝統的な社会システムの中で、流れに流されて機械的な生を生きるアントンとは対照的に、アーシュラは熱烈に自由を希求する。大学入学資格試験に合格したアーシュラは、自由になるために家を出て、教師になろうとする。「家」はアーシュラが否定する「縛り」「固定」「拘束」「秩序」の象徴している。教師として学校に勤務するが、そこは彼女が期待するような場所ではなかった。彼女は学校が子供たちを押さえつけ、縛りつけ、生命にあふれた子供たちを秩序の枠にはめ込んでしまう、一つの装置となっていることに失望する。社会という巨大なシステムの安定と秩序維持を可能にする装置として、単なる機能に墮落してしまっている学校の現実にアーシュラは直面する。その装置の権化とも言うべき校長に、自由人アーシュラは、最初必死に抵抗するが、結局は「社会」という周囲の圧力に負け、結局は「秩序」側の手先となって働くことを余儀なくされてしまう。

学校との契約期間が終わると、アーシュラは憧れの大学生活を始める。最初は、魅惑的な知の世界に身を浸す喜びに胸を弾ませていたのだが、次第に知の神秘の伝道者たちの現実に気付くようになる。彼女の希求する自由への手がかりを与えてくれるはずの大学の現実は彼女の期待を大きく裏切る。"the religious virtue of knowledge was become a flunkey to the god of material success." (R403) 一見、自由への扉が開いているように見えて、いざ近づいてみると、それは "a gate into another ugly yard, dirty and active and dead." (R404) であったりして、常に失望させられることばかり。大学に絶望した彼女の元に、輝く自由への扉を開く鍵を握っている男が再び彼女の元に帰って来る。大きな世界へ "the illimitable, endless space for self-realization and delight" (R406) へ、そして「魂の樂園ともいうべき尽きない自由」へと彼女を導いてくれるはずの男。

物理学の教授との、生物の意志をめぐるやり取りで、彼女はさまざまに思考をめぐる。教授の言うように、それは「物理的・化学的諸作用の結合」なのだろうか？自己実現のためなのか？アーシュラはこう断案を下す— それは自己保存や自己主張のためなどではない、と。

It (self) was a consummation, a being infinite. Self was a oneness with the infinite. To be oneself was a supreme, gleaming triumph of infinity. (R409)

アーシュラは「新しい生命、新しい現実」に飛び込みたいという思いを強くもつ。久しぶりに会うアントンは落ち着いていて、自信に満ちているように見えるが、心の方は前よりいっそう優柔不断に、曖昧になっていることをアーシュラは見抜く。軍隊での「習慣的な行動」が表面的には自信に満ちた、落ち着き払った外見をもちながら、それとは裏腹の内面をうかがわせる。こういうちぐはぐなありようが、アーシュラに "Skrebensky had never become finally real." (R457) と思わせる重要な要因になっていることは疑いない。習慣的な行動は生の「固定」であり、「束縛」であり、「否定」である。アーシュラの求める "the new life, the reality" (R409) への橋渡しどころか、彼自身は、言わば「機会人間」であった。

更に、彼女の開かれた自己の獲得の希求は Bitterness of Ecstasy という章にも見られる。アーシュラは、永遠の大空としか交わることをしないその丘陵に顔をつけて、うつぶせに横たわる。そして突然、大空の下、自分自身もあの丘陵になってしまいたいという気持ちに見舞われる。風と雲と日光に自分の全身をさらしてみたいと思う。突然アーシュラを襲ったこの衝動は、かつて月光の夜にすっかり意識の衣を脱ぎ捨てて、月との交歓に陶酔し、ついその月に向かって走り出させた、あの衝動と極めてよく似ている。

また自然界で裸になるもう一つの場面は、この同じ章の Bitterness of Ecstasy にある。この時は月夜ではなく、星が夜空に瞬いている。彼女はまず自分が服を脱ぎ、そして彼にも脱がせる。そして夢中になって草地の上を二人で駆ける。急に立ち止まって彼を抱きしめるが、ここで彼女と一つになっているのはアントンではない。星が彼女と一つになっているのである。"— it was as if the stars were lying with her" (R430-1) そしてこの丘で一夜を過ごし、充実した夜明けの「新生の光」に "everything was washed into a being, in a flood of new, golden creation." (R431) と喜びに満たされたアーシュラは、激しく魂を揺さぶられ、涙を流す。まるで、何か違う存在に変貌したかのように、燃えるような美しい涙を。しかし、"Nor was his the hand to wipe away the burning, bright tears." (R432) ことを自覚するアントンは無力感に襲われる。

このように、自然の中で裸になって自然とふれ合う場面は *Women in Love* にもある。例の、パークンが森で裸になってころげ回るシーンである。パークンとの長年に亘る確執に疲れ果て、ついに、彼は自分を閉じ込める壁なのだ、この壁を打ち破らなければ、自分は死ぬ以外にないと思うほどに追い詰められたハーマイオニが、自分の部屋を訪ねてきたパークンの背後から近づき、文鎮で頭に攻撃を加える。二度三度と頭部に攻撃をうけるが、彼は何とか難を逃れる。なぜか彼は、雨上がりの森に逃げ込み、丁度この *The Rainbow* のアーシュラが衝動に駆られて服を脱ぎ、草地の上を走りまわるように、服を脱ぎ捨て森を走りまわる。そして、裸のまま雨に濡れた草地に身を横たえ、草花のひんやりした感触に身を浸す。そして同時に、草花の精気が自分の血管に伝わり、それが全身に行き渡り、再び満たされたという思いに駆られる。そしてこれこそ自分の身を置く場所、結婚の場所だと認識する。*Women in Love* のこの場面の緻密で詳細な描写に比べて、*The Rainbow* の描写はどこか曖昧で、説得力に欠ける。しかし、ここでアーシュラを駆り立てる衝動

は、パークンのそれと酷似している。その点で、アーシュラは極めて、パークンに近い感性をもっていることがわかる。

アーシュラは物語の最後の場面で、うごめく日常の意識の世界から静止した非日常の無意識の世界へと誘われる。馬に襲われ死の危険にさらされた時の事である。彼女は昏睡状態の中で、自分だけはこの流転する世界の流れのそこに沈んだ石であるかのように感じる。この体験を通して、アーシュラは「何か存在の確かさ、永世」といったものを感じ取っている。「川底の石」。どんな嵐にも傷つけられず、何物にも犯されない「したたかさ」が彼女の内に築かれる。「アントンと彼が代表する世界、係累、一この世のものは何も実在ではない。親、兄弟、一いろいろなものが私に絡み付いて縛っているかもしれないが、すべては幻。」

アーシュラは、いわばどんぐりの実。彼女はその果核で、その外皮は彼女を取り巻く過去の世界。着古した古服である。*Women in Love* のアーシュラと同じく、アーシュラという果核は今古い殻を破ろうとして、その殻に裂け目ができている。新しい「一日」、新しい大空のもとに、新しい息吹を吸い込み、自由な、新しい実在意識をもって「新しい実在」を築こうとしている。

アーシュラは、「アントンが本当に動かない真実になったことは一度もない。」と述懐する。それはおそらく、彼の実体である果核で彼女のそれに触れてこなかったことを意味している。一時的な欲情に衝き動かされて、一時的に触れることはあっても、永遠にふれあいの痕跡を残すほどの「実在感」はない。しかし、今アーシュラは過去の形態の中に、「生ける神」の創造の手になる「新しい実在」の兆しを認められるような気になっている。いわば、希望の虹を見ている。

IV

歳のわりに成熟したアーシュラは世の中の欺瞞を鋭く批判する。彼女の批判の矛先は伝統、物質主義、機械文明などさまざまな方面に及ぶ。憧れだった大学や教授たちも例外ではない。彼女にとって、教授とは商品を扱っている仲買人。大学は将来の金儲けのための装備を一段と身に付ける、"a temple converted to the most vulgar, petty commerce" (R404) に過ぎない。更に、大学の授業に対する失望も深い。

to answer examination questions, in order that one should have a higher commercial value later on?... the inner commercial shrine. ... Had she not come to hear the echo of learning pulsing back to the source of the mystery? (R404)

アーシュラは常に拒絶と反発に終始している。彼女の実体はいわば灰の中に埋まったひと粒の種子。彼女は少女の時から、光の限界と暗黒の存在を意識していた。闇の中に明滅する、その光の点は太陽に照らされた光の世界だけでなく、闇の世界も同時に存在している事を主張している。William

Blake が *The Tiger* で明らかにしたあの同じ主張を、アーシュラは聞き取っていたのである。

She was full of rejection, of refusal. ... within the darkness she had been aware of points of light, like the eyes of wild beasts. (R405)

一方アントンは、彼女のために何か「新しい生命、新しい現実」への扉を開いてくれそうな気がした。ところが、いつも彼は肝心な自分を避けて、わき道ばかりを辿っているようにしか思えない。奥深い、闇の部分に向かい合わず、表層的な自分の意識の満足に留まっている。

He was always side-tracking, always side-tracking his own soul ... But that was not her road. (R411)

アントンは本来、魂の住人ではなく、社会的な存在として生きることしか出来ない。世間的に自分の足場を築き、人々を支配する立場の自分を眺めて満足するタイプの人間である。彼のインド行きの意味は、実はそこにあった。「支配階級の一人になること」、そこに彼の生きがいがあった。対して、アーシュラは自分が彼とは全く異なるタイプの人間であることは十分に認識している。それにもかかわらず、彼女は彼を、彼の肉体を、その輝きを愛した。「彼の美しい顔、眼」、「彼の美しい姿」が彼女を夢中にした。つまり、彼女の表層の意識を魅了したのである。

彼の「視覚的な美」は彼女を夢中にし、生の別の領域へ誘うという点で重要な役割を果たしている。アントンが視覚的な意識の世界を超えることはないが、アーシュラは違う。彼女は流動する暗黒の流れに一体化する。意識の光は消え、生の充足を経験する。無垢の暗黒を体験する。この時、アーシュラは、いかにもバーキンが言うようなことを呟く。

The stupid lights, the stupid, artificial, exaggerated town fuming its light. It does not exist really. ... nothing. (R415)

アーシュラには「灯火という町の制服はペテン」に思える。ここで彼女は見せかけの世界の底に流れる「暗い流れ」をはっきりと見抜いている。暗い、盲目の波。美しく装われた動物。

年齢のわりにませたアーシュラは、美しい"dressed-up creatures"はうまく社会的機械作用に手馴らされた「原始的暗黒」なのだと思う。表面的には「会社員」とか、「教授」といった衣を身に付けて、いかにもそれが自分の本体であるかのようにふるまってはいるが、実は生の暗黒。「生命豊かな」暗黒を内に秘めた生き物。彼女にはすでにこういう見せかけを見破る知性と感性が備わっている。アーシュラは、アントンとの初めての「ふれあい」に誘われた暗黒の世界で、「不思議な孤独」の力強さを体感する。そこに「自分自身」を発見し、それが何かを知る。それは、いわば

「永遠の自我」とでも呼ぶべきものである。そういう境地に達している時、アントンは彼女とは無縁の存在と化している。しかし、そのように彼女が自分自身を獲得している時、一見矛盾しているようだが、彼女の全身は彼という存在と、全人としての彼と固く結ばれている。

アントンが結婚を持ち出すときに、"Yes" と答えないのは、「自由」が奪われ、「深い世界」と無縁になってしまうことへの不安に他ならない。

おわりに

ロレンス自身が言うように、*Women in Love* は確かに *The Rainbow* の "a sequel" である。Leavisの、ロレンスは1916年当時にはすでに *Women in Love* の作者になりうる力量を持っていたという指摘は的を射ているが、二つの作品の関係を否定する発言には疑問がある。ロレンスは *The Rainbow* の執筆中に、おそらくバーキンに見合う女性の創造の必要を認識したに違いない。ロレンスは新しい意識を持った二人を通して、何か新しい存在の様式を模索しようとした。終章近くでふとつぶやく、"I want to go" という言葉のひびきにはより充実した自己の存在を獲得しようとするアーシュラの思いがこもっている。そしてそれは *Women in Love* のバーキンとアーシュラの思いとも重なる。

ロレンスがこの *The Rainbow* をバーキンと対等に対峙しうるヒロインを創造するために書いたのは明らかである。そのことはこの物語が8章以降、アーシュラを中心に展開されていくことでも明らかである。

※本文中の訳文はすべて中野好夫訳による。

Works Cited

1. D.H. Lawrence, *The Rainbow* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990)
2. D.H. Lawrence, *Women in Love* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990)
3. F.R. Leavis, *D.H. Lawrence: Novelist* (Harmondsworth: Penguin Books, 1976)

Bibliography

1. Richard Beynon, ed. *D.H. Lawrence The Rainbow Women in Love* (Cambridge: Icon Books,1997)
2. Virginia Hyde, *The Risen Adam D.H. Lawrence's Revisionist Typology* (Pennsylvania:

The Pennsylvania State University Press, 1992)

3. Barbara Ann Schapiro, *D.H. Lawrence and the Paradoxes of Psychic Life* (Albany: State University of New York Press, 1999)
4. Gavriel Ben-Ephraim, *The Moon's Dominion*, (New Jersey: Associated University Presses, 1981)
5. H.M. Daleski, *The Forked Flame A Study of D.H. Lawrence* (Evanston: Northwestern University Press, 1965)